

変と変文 荒見泰史

中国の絵解きと「変文」

今日、中国の絵解きが論ぜられるとき、必ずといって良いほど「変文」について言及がある。これらよりみても、斯界において変文はすでに中国通俗文学史上重要な作品であることが広く知られ、またそれが絵画をともなっていたことも認知されているようである。

とくに中国国内においては自国の国文学史たる中国文学史の概論書に「宋代話本」、「明清小説」に先立つ文学作品として「唐代変文」の一大項目をたてているものすらあり、中国文学史上の一発展段階と理解されている。^[1] そのような重要な作品であるから中国の人文系専攻の学生では変文について

知らぬものはないと言って良いほどである。

それゆえに中国においては、論考、專著も多く著されることになるが、しかしここには以てなほど基礎的な部分をあつかう研究が多い。たとえば変文の研究では、写本を調査翻刻しテキストの細部について研究するもの、または変文と同じ敦煌文献から周辺資料ともいべき資料を搜索し変文に関する諸問題を研究するもの、または広く文献記載を調査し変文に関連する記載を搜索するもの、などがおおいのである。そして、それぞれの研究において、必ずと言って良いほど「変文とはいったい何か」というもつとも核心的部分が議論されている。

以上のような研究が多いのは、じつは変文について、いく

つかの基本的な部分が解明されていない点による。

たとえば変文の本質を問う「変」字の字義については、これまで様々な説が立てられてきている。

- ① 変とは変相画の「変」である。^②
 - ② 変とは南朝清曲中の「変歌」にはじまる楽曲の名称である。^③
 - ③ 変とは「変更」という意味で、経典をわかりやすく変化させた文である。^④
 - ④ 変とは「変怪」「神変」の意味で、そのような故事の内容を指す。^⑤
 - ⑤ 変とは経典中の「神変」を題材としたもので、絵画で表したものが「変相」、文で表したものが「変文」である。^⑥
- 変の語義についての討論は変文の発生や展開を考える上で重要であることはいうまでもない。たとえば変相の変と考えれば、変文は絵画との関係が濃厚であったことになるが、文変を変更したもの、とするならば本来的には必ずしも絵画との関係があったとは限らない。経典内の「神変」物語の内容を指すものとするれば、経典中の教義、教理を解釈する講経文のようなものは変文には含まれないことになる。⑤はいわば①、④の折衷案で、現在ではこれを支持するものが最も多い。

文体についても数説ある。

① 韻文体である。^⑦

② 語りの散文と歌唱する韻文を交互にならべる講唱体（説唱体）である。^⑧

③ 語りの台本あるいは種本であり、文体はさまざまである。^⑨

以上のように文体についてすら異論がある。今日では②の講唱体（中国語では説唱体または散韻相間体とも言われている）を支持するものが多くなっているが、実際のテキストから見ると例外もあるため（後述）、③の立場を取る研究者もある。混乱の中で②を「狭義にいう変文」、③を「広義にいう変文」などと称し、両説を併用している論文は数多い。

またこの文体に関する説に、上述の変の字義に関する説を組み合わせ、変文は絵解きのための台本または種本である、とする説がある。とくに講唱体の散文の末尾に絵解きに使われていたことを示すセットフレーズ「看……処」「且看……処」この処を見よがおおく見られるので、これをもって変文は講唱体でなければならぬと主張する学者がおおいのである。しかし、他の文体でも絵画との関係は否定できないわけ、ほかの文体でも絵解きの種本、手控えとして使用された可能性は否定できない。また現存する変文のテキストと絵画では、莫高窟壁画との関係の有無など数説がある。

変文成立の年代に関しても数説ある。代表的なものは以下

のようなものがある。

① 変文自体、または原型となるものが六朝には成立していた。¹⁰⁾

② 変文は唐代に成立、発展した。¹¹⁾

③ 五代から宋にかけてつくられた。

とくに①を主張するものは、古典文献の電算化によって文献調査が比較的容易になった近年、さらに古い時代に遡って用例を探索し変文との関係を論ずる傾向にあり、古いものは変文の起源を東晋時代(三四四〜四二〇年)に遡って考えるものすらある。②はもつとも早期の業績によるもので、唐代の俗講と変文を結びつけたことによる。③は主として現存写本が五代以降のものであることによる(後述)。

本稿では、このような諸説紛々とする変文研究について、一、変文の文体について、二、変文と絵画との関係について、三、変文成立の時代について、の三点を、研究の現状も交えてさらに詳しく紹介し、筆者の意見をまとめておこうとおもう。

変文とはなにか——変文写本の発見

変文とは、近年発見された現存テキストより見るに、主として唐末から五代(九〇七〜九五九年)・北宋(九六〇〜一二二七年)初期に(敦煌ではいずれも帰義軍節度使支配時代)筆写されたと

みられる通俗文学作品の一種で、絵解きなどの語り物に使われた台本、あるいは種本と考えられている。

この変文を用いた語り物は、文学発展史のうえでは宋代話本、明清小説へとなされる通俗文学発展の源流のひとつと位置けられるべきもので、現在の文学史観からいえばたしかに重視されてしかるべきである。しかし、当時の士大夫文学主流の時代にはこのような通俗作品が記録されることはきわめて稀で、変文は当時の流行がすたれてしまうと、テキストやそれにとりまなう絵画なども後世に伝承されることはなくなってしまった。かくて、変文は近年の発見に至るまで、千年の間忘れ去られていたのである。

しかし、二〇世紀初頭に甘肅省敦煌莫高窟の一七号窟で発掘された唐代の寺院文書¹²⁾、いわゆる敦煌文献のなかから変文のテキストが発見され、一躍脚光を浴びることになった。この時代が、たまたま五四運動前後の時期に重なったことも注目を集めた理由の一つであろう。というのも、当時の中国文学界は、人民、通俗文学を中心とした文学史観を作り出そうという新たな方向に向かっていった時期だったからである。

しかし、このように一躍学界で注目をあつめた変文であるが、現存する全ての文献が一時に斯界に紹介されたわけではなかった。それは、主として敦煌文献が手書きの抄本で完本ではないものや題目を残さないものが多く、徐々に解読が進

められるのを待つほかなかつたという経緯による。また、なによりも敦煌文献は五万点と膨大であり、しかもイギリス、フランス、日本、ロシアなど当時の列強諸国によつて持ち去られ、各国の研究機関での整理状況によらねばならなかつたという歴史的背景がある。ともかく、現在われわれの目にするのできる変文のテキストは数十年の期間を経て少しずつ発見され、徐々に数を増やしていったものであることを心に留めておかなければならない。というのも、後述するが、これが現在の変文研究をすこし複雑にする原因の一端となっていると思えるからである。

ここでは、まずこれまでに敦煌文献の中から発見された変文の写本を紹介しておこうと思う。ただし、変文に関しては異説があることはさきにも述べているところであり、写本に「変文」との記載のあるもののみを紹介するのにとどめる。少なくとも題目に「変文」と記載されているものは、紛れもなく変文であると称することができるはずで、変文とは何かをもつとも先入観もなく見ることができであろう。

現存する写本のなかで変文の名称が残されているのは以下の一七点である。

(1) P. 2187 首題：降魔変押座文

尾題：破魔変一卷

写記年：941年（文末の莊嚴文の記載による）

『降魔変文』

(2) S. 511 首題：降魔変文一卷

背面首題：降魔変一卷

(3) S. 4398 写記年：949年前後（正面文書の記載による）

『大目乾連冥間救母変文』

(4) S. 2614 首題：大目乾連冥間救母変文并図（並図の二

字は墨で抹消）一卷并序

写記年：921年（卷末識語による）

(5) P. 3107 首題：大目乾連冥間救母変文一卷并序（背面

にも「大目乾連冥間救母変文」の題目あり）

写記年：「大唐国……戊寅年」の識語あるも

推定年代は未詳。

(6) P. 2319 首題：大目乾連冥間救母変文一卷

尾題：大目健連変文一卷

R・大目乾連冥間救母変文

(7) P. 3485 首題：目連変文

背面尾題：大目健連変文

(8) 北京盈76 写記年：977年（卷末識語による）

『八相変』

【講唱体（説唱体、散韻相間体）】

【破魔変】

(9) 北京雲24 首尾ともに題目の記載無し

(北京837) 参考：紙背に『八相変』の記載あり

『頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因縁変』

(10) P. 3491 背面首題：頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔

生天因縁変

『醜変』

(11) P. 3048 首題：醜女縁起

参考：文中に「醜変」と言う作品名あり

写記年：922年或いは982年 (背面識語による)

『漢将王陵変』

(12) P. 3627 尾題：漢八年楚滅漢興王陵変一鋪

(小冊子) 写記年：939年 (識語による)

(13) S. 5437 首題：漢将王陵変

(小冊子)

(14) 北大D.188 首題：漢将王陵変

(小冊子) 写記年：981年前後 (識語による)

『韻文体』

『舜子変』

(15) S. 4654 首題：舜子変一卷

写記年：954年 (識語による)

『散文体』

『舜子至孝変文』

(16) P. 2721 背面尾題：舜子至孝変文一卷

『劉家太子変』

(17) P. 3645 首題：前漢劉家太子伝

尾題：劉家太子変一卷

写記年：945～947年と推定される (識語の「大

漢国」との記載による)

題名や題記に「変文」もしくは「変」の文字のあるものは、とくに真題変文もしくは題名変文などとよび、しばしばこれらを分析する研究手法がとられる。すくなくとも上記の一七写本はまぎれもない変文であり、これらの共通点を帰納分類することによって、他の題名のない写本を変文であるか否かを判定する手がかりとなるからである。

上記一七写本を概観すると、まず文体については一四写本までが講唱体と圧倒的である。しかし、他の三写本の文体を考慮にいれるのであれば、韻文体、散文体と文体の異なる作品もあつたことになる。また絵画との関係は後述するが、少なくとも題材よりみた場合、何れも変相画、壁画など絵画の題材となつたことのあるものが多い。なによりも「降魔変」など「……変」との題名は変相画の題名と共通している。年

代はもつとも古いものでも(4)、(5)の20年前後、新しいものは(8)、(14)の80年前後と、現存テキストよりみた場合、十世紀の半ばに集中していることがわかる。

以上のような特徴のみられる真題(題名)変文であるが、以下の章ではこれらを中心として様々な問題を分析していきたい。

変文研究史——文体に関する論争

変文の文体について論ずる前に、上述したような現状の学説にいたる経緯についてさらに詳しく紹介しておかなければならない。というのも、今日の諸説が形成されるに至った経緯には、単なる文献研究の進展によるものばかりではなく、時代背景という要素も関係しているからである。

まず、これを説明するためには敦煌文献の発見にまで遡らなければならぬ。

敦煌文献の発見はさきにも挙げたが一九〇〇年である。しかし、これが始めて学界に紹介されたのは一九〇八年、北京でのこと⁽¹⁶⁾で、スタインに続いて敦煌から数千巻の写本、絵画を入手していたペリオによるものであった。彼は写本の大半を母国フランスに搬送したあと、とくに貴重な数点の写本を北京で公開したのである。この時の詳細については専論もおおく贅言を要さないが、ここで少し注目しておきたいのは、

公開当初、羅振玉氏の紹介文『敦煌石室書目及発見之原始』(二九〇八年)では四書五経や士大夫文学についての言及が主で、まだ通俗文学作品がさほど重要視されていないと見られる点である⁽¹⁷⁾。

しかし、その後の五四運動前後からは、学界においては通俗文学作品が偏重される傾向がよくなり、一〇年代後半に狩野直喜氏らによつて敦煌文献中の通俗的な叙事詩や散文体文献が紹介されると、一躍して敦煌文献の文学史上における価値も認識されることになった⁽¹⁸⁾。

それに次いで、二〇年代の半ばになると、羅振玉氏『敦煌零拾』に敦煌の通俗文献の中に、はじめて語りの部分と歌い文句を交互に繰り返すいわゆる講唱体(説唱体)文献が紹介されると、評弾など近代以降の語り物との関係が強く意識されるようになり、研究史上それらを総称する学術用語が求められるようになつた。しかしこの頃にはまだ作品名を残す写本は発見されていなかったので、『仏曲』などの名称が試みにつけられるのに留まつていた⁽¹⁹⁾。

変文という題名を残す講唱体『大目乾連冥間救母変文』が紹介されたのはこの後の二〇年代末のこと⁽²⁰⁾で、青木正児氏、倉石武四郎氏による。それ以降は当時最も注目をあつめていた講唱体の総称として変文の名称が使われるようになり⁽²¹⁾、やがてのちの変文Ⅱ講唱体との説につながっていくこととな

る。ところがそのときには既にごく少数ではあるが講唱体以外にも変文の名称が使われていることをしめす写本が発見されていた。²²⁾これによって必然的に『変文』とは文体にはかかわりがなく、広く同時代の語り物に関する文献を称するものである。との説も唱えられて不思議ではなかったのである。しかし、先の変文Ⅱ講唱体と考える研究者たちは、文体上の例外がごく少数であり、かつ時代の要求もあつてかこれらをごく少数の例外とする立場をとり、結局二説が対立して現在でも結論は出ていない。専門の研究論文にすらしばしば「広義にいう変文」であるとか「狭義にいう変文」などという言いまわしが登場するのはこのようにきざつによるのである。

しかし、筆者の最近の調査によれば、さきの目録にもみられるように現存する真題変文のみからみても、韻文体の変文、散文体の変文があつたのは間違いない。

一七の真題写本のなかで、大半の一四までが講唱体であつたことを主張される研究者も多いが、講唱体が比較的整つた台本的なスタイルをもつものに対し、散文体や韻文体が種本、手控え的なスタイルであることを考えた場合、単なる種本ゆえに題目が記されているものが少なくとも不自然さはないであろう。たとえば、明らかに『降魔変文』の韻文部分のみを抜き書したP.452^{14a}、『劉家太子変』の一部のみを抜き書きしたP.469²、P.4051^{15a}という写本もあるが、いずれも

題目を残していない。また、敦煌文献のなかには、散文体変文に類似する、故事を抄録した手控え、メモ書きともみられる写本がおおく見られているが、いずれも題目は記載されていない。これらと変文の関係は完全に解明された訳ではないが、多くの写本が変文と深い結びつきを持つものであることは予測されるのである。²³⁾これらも考慮に入れた場合、真題変文の比率だけでは講唱体が本当に圧倒的多数であつたかどうかは判断できない。

少なくとも筆者は、変文とは何らかの用途をもつて命名された名称であつて、特定の文体を指すものではないと考えている。

これは、変文の文体分析によって証明される。

というのも、上述一七種類の変文は、とくに散文部分の文体に不統一さが見られる点による。具体的には散文による描写の部分に、いわゆる古文体、駢文体、六言の賦体が不統一に使用されていることである。この点は金文京氏が始めて疑問点として指摘されたものであるが、²⁴⁾筆者の推定では、これらは異なる文体の作品を抜き書きして、新たな作品を作り出したためにおこつた現象ではないかと考えている。その論拠となるのが(15) S.4654『舜子変』と(16) P.2721背面文書『舜子至孝変文』の文体分析の結果である。この点は拙稿に数度取り上げたことがあるが、²⁵⁾要約すれば、(16)のP.2721

Ⅴ『舜子至孝変文』は、六言賦体の作品（恐らくは(15) S. 4654『舜子変』と同系統の作品）と、P. 2621『擬題 孝子伝』の文言体、そして七言韻文二種（S. 389『擬題 孝子伝』中に記載されるものと同系統のもの）と、少なくともすでに存在していた三種類以上の作品を繋ぎ合わせて作り出されたものである、というものであった。

ちなみに、このような現象が見られる作品は、講唱体文献中でも『降魔変文』など幾つかの文献にも多く見られ、また、もつとも甚だしい作品としては『八相変』、『悉達太子修道因縁』、『太子成道経』など一連の仏伝物語の作品があげられる。これらは基本的には同じ仏伝物語であるが、中では五言韻文を七言韻文に書き換えたり、韻文体を散文中に取り入れたり、韻文を入れたり入れなかったりと改編がとくに著しい。

このようなことが行われたのは、現存するいくつかの変文テキストが、記録して後世に残そうという意志をもって書かれたものではなく、あくまでも一時的に、芸人などのための閲覧用か、実用に供されたものであることを示しているのではないか。おそらくは実際の講唱の形式に依じて、既成の文から必要な部分を取捨選択して繋ぎ合わせ、あるいは韻文を付け加えたり削除したり、またあるいは歌唱法によって五言を七言に変えたりとしたもので、臨機応変に繋ぎ合わせ

れたことを想わせるのである。

このように文体を調査すると、変文とは、語りの台本もしくは種本として徐々に文体を整えながら繋ぎ合わされて成立しているかのようで、変文が講唱体などの特定の文体を指す名称とは考えにくいことがわかるのである。また、前節に、『変文は経典などの文体を変更した作品で成立も六朝時代にまで遡る』との説を紹介したが、上記のような現象を考慮にいれるならば、仮に六朝に早期の変文が実在したとしても、我々が目にして五代のテキストとは相当に異なるものであったに違いない。

変文と変相 — 絵解きとの関係

変文が絵解き講唱の台本であるとの説は、もつとも説得的に思われる。文体などで様々に異説が有るとはいえ、いずれの説も絵解き台本説と併用して矛盾がないため、絵解き台本説はほとんどの研究者が支持していると言って良い。

これは、二〇年代の研究草創期のころにはすでに現れた説で、『降魔変』、『太子成道変』等の名称が、張彦遠『歴代名画記』等という「西方変」、「金剛変」、「浄土変」、「維摩変」といった変相画、密教に言う「曼荼羅絵」の名称と酷似するところから指摘されたもので、内藤湖南氏、倉石武四郎氏（二九二七年）の指摘がもつとも早い。この説は、のちに①

『大目乾連冥間救母変文』に「並凶」の二字があること（矢吹慶輝氏 一九三三年）、②『全唐詩』吉師老「看蜀女転昭君変」に「画卷開時塞外雲」の句があること澤田瑞穂氏 一九三九年）、③P. 4524の『降魔変画卷本』の背面に『降魔変文』の韻文部分が記され、画卷本を聴衆に見せながら変文の説唱が行われていたとみられること（V. N. Nicolas 一九五四年）、④「王陵変」冒頭の韻文前の「從此一鋪、便是変初（ここから一鋪、いよいよ変の始まりです）」、また「王昭君変文」中段の「上巻立鋪畢、此入下巻（上巻の絵はここまでで、ここから下巻に入ります）」とある「鋪」字が絵画を数える単位であること（水谷真成氏 一九五七年『天谷支那字報』第2号）、⑤北京7707に見られる空白部分が絵画を書き込むためにあけられた空間と見られ、『目連救母変文』に絵画を伴うものがあつたと考えられること³³。などによって、これまでに補強されている。変文と絵画との関係はもはや疑う余地はないといつて良い。ほかに、⑤変文の変を「サンスクリット語のcitraの翻訳語であり、変化、変奇とともに画解の意味を持つ」とするもの³⁴（周一良 一九四七年『説唐代俗講考』、『大公报・図書館周刊』第6期）、⑥変文を「サンスクリット語の mandala 曼荼羅である」とするもの³⁵（関徳棟 一九四九年『略説「変」字的来源』、『大晚报・通俗文学』第25期）なども、変文、変相図につかわれる「変」字の語源から、変文が本質的に絵画と結びつくもので

あるとの説を補強している。

もう一点、変文テキストからも絵画との関係を窺うことができる。というのは、一部の講唱体写本の散文と韻文の間の部分、つまり散文での説明が終わって韻文を読み始める前の部分に「看……処」、「且看……処」（……の場面を見てくださ）などの、変文が絵解きであつたことをおもわせるセットフレーズが使われていることである。

たとえばS. 5014『大目乾連冥間救母變文』には「……処」〔3箇所〕、「看……処」〔1箇所〕、「且看……處」〔1箇所〕などがある。

先得阿羅「漢」果、後當學道、看目連深山坐禪之處、……

且見八九個男子女人、閑閑無事、目連向前問其事由之處、……

唯有啓問世尊、應知濟拔「之」路。且看「與」母飯處、……

類似する記載は、『降魔変文』にも「……若為」（1箇所）、「……若為陳」（1箇所）、「……之處」（1箇所）、「……處、若

為(1箇所)、「看……處、若為(1箇所)、「……處若為」(1箇所)、「且看……、若為陳說」(2箇所)等がみられ、また『漢將王陵変』にも「……處」(1箇所)、「看……處、謹為陳說」(1箇所)、「而為轉說」(1箇所)、「處、若為陳說」(2箇所)、「若為陳說」(1箇所)、「而為轉說」(1箇所)などがみられる。

須達既見門開、尋光直至佛所、旋繞數十餘匝、竭專精之心、注目瞻仰尊顏。悲喜交集處、若為陳「說」、……

『降魔変文』

舍利弗共長者商度處若為、……

『降魔変文』

不那聖力加被、須臾向周。餘殘數歩已來、大段欲遍。看布金處、若為、……

『降魔変文』

舍利弗見此蟻子、含笑舒顏、對須達祇陀説宿因之處、……

『降魔変文』

且看詰問事由、若為陳説、……

『降魔変文』

これもたしかに変文が絵解きのテキストであったことを説

明する証拠の一つである。これらについては、先の変文の文
体は講唱体であるとの説を主張する研究者たちからは、変文
が絵解きのテキストであるならばこれらは必要不可欠なセツ
トフレーズであり、このセツトフレーズがない(つまりは講
唱体でもない)作品は変文ではないとの主張にまで発展して
いる。この論理はある程度説得力があるようにおもわれ、現
在では多くの研究者がこれによっており、また題名のないテ
キストが変文であるか否かを判定するうえでの根拠ともされ
ている。

以上の諸説をもとに、以下に改めて絵画と真題変文の關係
を考えてみようとおもう。

講唱体の『破魔変文』、『降魔変文』、『王陵変』、『大目乾連
冥間救母変文』、『醜女縁起』、『頻婆娑羅王后宮綵女功德意供
養塔生天因縁変』では、いずれも上述のようなセツトフレー
ズがあるので、これらについては強いて反論が出されること
はないであろう。現存する壁画としても、『降魔変文』など
は『労度叉闍聖変』が唐末から五代頃におおく描かれている
①、P.4524の画卷本があることはさきにも触れている。『醜
女縁起』は、画卷本があったとする証拠こそないが、この
「醜女変美」の故事は当時流行していたと見えて、莫高窟晚
唐の九八、一四六号窟壁画にも「波暗羅醜女変美」変相画が
みられる。たしかに講唱体文献と絵画の關係を調査すると、

両者の関係を説明し得る資料はおおい。

しかし、筆者の考えでは、さきの一七点の真題変文中、文
体上例外であった三写本についても絵画をとまなつていた可
能性は否定できず、講唱体ではなくとも絵解きのテキストと
することに検討の余地を残している。

少なくとも孝子の話は武梁祠漢墓などからもわかるように
漢代以前から描かれていたことがわかり、古くから絵画の題
材となつていたことはまちがいが無い。とくに孝子舜子とし
ばしば併記される董永の話では、敦煌文献のいわゆる広義に
いう変文 P. 3654a 『句道興本搜神記』に董永の説話を節録し
たものを残し、『劉向孝子図』を典拠としたことを注記して
いる点は看過できない。少なくとも変文と同時期には董永の
説話に絵画を伴うものがあつたことは明らかなのである。
『劉向孝子図』は現存しないが、孝子という題目から推測し
て舜子の説話も収録されていたに違いない。ややつた南宋
になると、『二十四孝書画合璧』が残されているので、参考と
なる。

『劉家太子変』に関してはこれまで絵画との関係の指摘さ
れたことが無いが、絵画をとまなつていたことも否定できな
い。以下に筆者の見解を述べてみよう。

まず『劉家太子変』の写本、P. 3654bであるが、巻頭に
「劉家太子」の故事をおき、その後には6の故事をならべる

というものである。その内容は、A 劉家太子が王莽に皇位を
篡奪され、その逃走のなかで復位を誓い崑崙山上の太白星を
求める話、B 西王母と崑崙山の玉石の話、C 西王母と東方朔
の仙桃に纏わる話、D 東方朔と漢武帝の寿命についての話、
E 宋玉とその友人による苦難が生命を鍛える話、F 鄭簡公と
燕昭公の賢者を登用する話、G 漢帝の寵臣された董賢が王莽
の皇位篡奪にあう話、の合計七つの故事である。これらの故
事は、一見して無関係な故事が並べられているかにもみえ、
王重民氏は『敦煌變文集』注釈のなかで「按西王母故事後面
三個故事、都與劉家太子故事沒有關係。」とされていのも無
理からぬ事かもしれない。³⁸⁾

しかし、筆者の見解では、この写本は意図してこのような
配列をされているので、無関係な故事が並んでいるものでは
なさそうである。第一に無関係に雑然と配列した故事雑抄
を、同じように幾つも写本を作成することはないだろうし、
加えて、そうした写本に対して一様に『劉家太子伝』、『劉家
太子変』と劉家太子の名称を冠することは不自然である。

故事の内容を分析しても、何らかの意図で最初の劉家太子
の故事と連絡があるものがほとんどである。たとえば①劉家
太子が王莽の篡奪から逃走し、困難を経て最後には崑崙山を
目指す話、②劉家太子の目指した西王母の居る崑崙山に纏わ
る故事、③王莽の篡奪にかかわる話、と集約でき、一つの中

心となる①の物語と、それに関わる周辺の挿話から成り立っているとも見ることが出来る。あたかも一幅の絵画を想像させる配列ともいえないか。

これは推量を交えたものであるが、敦煌文献のなかには、じつはこのような散文体をもって絵解きを行ったとおもわれる資料もみられるのである。

たとえば北京8670(洪62)『擬 本縁経抄録』S.1092『擬 本縁経抄録』などがそれである。これらは上述するような散文体の故事を列挙する体の文献で、釈迦の前世譚を記録する文献であるが、中には莫高窟壁画の傍題を抜き書きとみられる記載が混入している。たとえば北京8670の137と150行目には「尸毘王」の故事、151と164行目に「薩埵太子捨身飼虎」の故事などは、始めに故事の摘要があり、のちに壁画の傍題を写記した「……処(……の場面)」、「……時(……の場面)」という記載が続くのである。これらの写本と絵解きの関連について、詳細は稿を改めたいと考えるが、現時点で少なくともこれらのような説話の綱要本と絵画を関連付けることはできるのではないかと考えている。^④

このように見てくると、『劉家太子変』の記載の中に、「……、當此之時処(……このときの場面は)」の記載がある点に注目がいく。これまでの解釈では、文の流れからみて「処」字はいかにも衍字であると見られたため、解釈上困難

となり、「……當此之時、処有東方朔在於殿前過見……」と校されたり、「時処は同義複合語で時と同じ」などの解釈がなされたりと、^⑤定着をみない一文であった。しかし、故事雑抄体ではあっても絵画を伴う変文であったとの考えによつて、上記のように読めば、北京8670やS.1092のように壁画の傍題を折り込む散文体のスタイルや、変文のセットフレーズにも類似する記載であると考えられなくもない。これらなども故事を抄録する散文体が絵画を伴っていたことを思わせる記載であるとの推測も可能ではないかと筆者は考えている。

変文の成立した時代

さて、最後に変文成立時代に関する問題について簡単に述べておこうとおもう。

少なくとも現存する変文が成立した時代は、真題変文と、それに類似する擬題変文の写作年代から推測できる。擬題変文とは、真題変文と共通点をもつ文献をさす。ここでは仮に、講唱体もしくは通俗講経に使われたと考えられる文献(押座文、講経文を含む)、「看……処」などの注記のあるものまでを範囲としてまとめてみた。

まず、講唱体変文とその他の講唱体、また関連するとみられる文献が書かれた年代を一覧にして紹介してみよう。

930年 S.5892 『悉達太子修道因縁』(914年?) [最初の韻文(押座文?)のみ]

P.2133 『(擬)妙法蓮華経講経文』(920年) [正文部分]

P.2133 『(擬)金剛般若波羅蜜多経講経文』(920年) [正文部分]

S.2614 『大目乾連冥間救母変文』(921年) [正文]

P.2249 『悉達太子修道因縁』(922年?) [最初の韻文(押座文?)のみ]

S.3711v 『悉達太子修道因縁』(923年) [最初の韻文と説明部分のみ]

P.3210 『(擬)仏説阿弥陀経講経文』(926年) [押座文、荘嚴文のみ]

P.3210 『維摩経押座文』(926年) [押座文のみ]

P.2418 『(擬)父母恩重経講経文』(927年)

P.3808 『長興四年中興殿応聖節講経文』(933年)

S.548v 『太子成道経』(934年)

S.4504v 『(擬)太子成道経』(935年)

P.3627 『漢将王陵変』(939年)

P.2187 『降魔変押坐文』、『破魔変』(944年)

P.2292 『維摩経講経文』(947年)

S.4398v 『降魔変文』(949年)

S.3491v 『頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因縁変』(944~953年)

S.3491v 『破魔変文』(944~953年)

S.3728v 『左街僧録大師押座文』(951年以前)

P.3375 『歡喜国王縁』(955年)

北京T707 (盈76) 『大目乾連冥間救母変文』(977年)

北大188 『漢将王陵変』(978年前后)

P.2193 『目連縁起』(九世紀末)

これらを総じて、やはり全てが九二〇年前後以降で、しかも十世紀文献しかないのである。敦煌文献の性質についてはここでは詳しくのべる紙幅はないが、年代が正確に判定できる文献では、最古の文献が四〇六年のもので、新しいものは一〇〇二年であり、またなかでも九、十世紀の文献が中心となることはよく知られている⁴³。九世紀文献も数多くのことされている敦煌文献の中で、変文やそれに関連する文献が十世紀には見られないのは何を意味するのか。

さらに、これらの文献を調査し、早期のものと同後期のものと比べると、後期のものでは一つの作品としてまとめられたものが多いものの、入話ともなる始めの韻文までそなえた講唱体文献は早期の写本となると少ない。むしろ早期のものでは講経など儀式の形式にあわせて押座文、荘嚴文などを独立

941~

させて写記するものがおおい。ちなみに、故事を抄録する散文体に属するものは九世紀から十世紀の文献にかけて多く見られている⁴⁴⁾。

これらと、さきの文体の項目で説明した、変文が説話を繋ぎ合わせて作られていく現象とあわせ考えたとき、少なくとも我々が目にする変文は、やはり十世紀頃の作品である可能性が高くなるのではないか。

また、この説に対しては、変文は唐代の俗講との関係が指摘されていることから異論もあるうかとおもう。たしかに九世紀始めの俗講と、通俗の語り物とは密接な関係が考えられるし、敦煌煌煌資料でも九世紀文献に P.3849V S.4417『擬俗講儀式』があり、敦煌でも九世紀半ばには俗講があったと考えられる。しかし、筆者はこれらの俗講のテキストとしては、今日われわれの目にする変文よりも、むしろ P.3849V『俗講儀式』と併記される説話文献『仏説諸経雜縁因由記』や、上海図書館蔵 68『玉璽金經讚述』、『温室經疏』またはベテルブルグ蔵 109『大乘八閻齋戒文』の方が近いのではないかと考えている。この点については拙稿を参照されたい⁴⁵⁾。

まとめ

以上に、変文に関する学説を紹介し、それに対する筆者の

考えを述べてきた。

これらを総じて、筆者は今後の変文研究は、故事を抄録する散文体故事集の調査が重要となるのではないかと考えている。というのは、文体研究の立場からみても、これらの幾つかが講唱体など新たな作品を作り出す上での土台とされており、あるいは絵解きなど語りの種本として使われていた可能性も指摘できるし、またこうした散文体と絵画が結びつくケースも見られているからである。

このような形式のものは『敦煌変文集』の中にも数点とりあげられているが、十分とは言えず、敦煌文献のなかには未整理の故事資料も多く残されているので今後の調査に期待したい。

この問題も含めて、最後にもう一点、散文体の説話資料『衆経要集金藏論』を紹介しておく⁴⁶⁾。

筆者の最近の調査で、敦煌文献には最低でも三点の『衆経要集金藏論』の抄録本がのこされていることがわかってい⁴⁷⁾る。この文献はおおむね『法苑珠林』と一致するものであるが、『衆経要集金藏論』では説話部分しか載せていない点⁴⁸⁾が異なる。日本においては興福寺本『日本靈異記』の背面に記載されており、日本では最早期の説話集として注目されたこともある文献である⁴⁹⁾。

興味深いのはこの『衆経要集金藏論』をさらに抄録したも

のが敦煌本 S. 4634 にあり、韻文体『舜子変』と併記されている点である。この S. 4634 は実は『大乘浄土讃』、『悉達太子雪山修道讃』、『功德讃』、『五更転』などの韻文なども併記するもので、語り物の綱要集とみられている写本である。他にも両面に『衆経要集金藏論』を抄録する写本 P. 3226 もあり、これらによって『衆経要集金藏論』は、敦煌では物語りの種本としておおく用いられたのではないかと予想されるのである。

さらに興味深いのは北京 807『衆経要集金藏論』では、莫高窟第 98 窟北壁下部分に帯状に描かれる故事壁画と、故事の内容、配列までが似ている点である。この 98 窟は 824 年に帰義軍曹氏によって開鑿され、大王窟とも呼ばれる窟である。年代から言ってもさきの北京 807 が写記され使用されていた時期にも近い。具体的つながりについては以降の研究を待つほかないが、やはり、故事抄録の写本と絵画、そして変文との関連は予測しておくべきであろう。

〔注〕

(1) 中国文学史で、はじめて「唐代変文」という項目名を使用したのは鄭振鐸氏『中国俗文学史』(一九三八年)である。最近の文学史では歴代王朝の区分によって編年的に叙述するものが多いが、たとえば章培恒氏主編『中国文学史』(復旦大学出

版社、一九九六年)などでも「隋唐五代文学」という時代区分のなかに「唐代的小説与講唱文学」という項目をあげ、「変文」について概説している。

(2) 文献資料の上でこの説を述べたのは倉石武四郎氏「目連変文紹介の後に」(『支那学』4・3 一九二七年)が最も早い。それ以前にも内藤湖南氏が同様の見解を持っていたことが倉石氏同論文上に指摘されている。

(3) 向達氏「唐代俗講考」(一九三七年初校)、『唐代長安与西域文明』三聯書店所収、一九五七年

(4) 鄭振鐸氏『中国俗文学史』(作家出版社、一九三八年)

(5) 孫楷第氏「中国白話小説的發展与芸術上的特点」(『論中国白話短編小説』棠棣出版社、一九五三年)

(6) 澤田瑞穂氏「支那唱導文学の生成」(『智山学报』13 14 一九三九年、一九四〇年)

(7) 青木正兒氏「敦煌遺書〈自連縁起〉〈大目乾連冥間救母変文〉及〈降魔変文〉に就いて」(『支那学』4・3 一九二七年)において、当時狩野直喜氏が韻文体の『擬題』董永変文』は講唱体の散文部分が省略されたものであると推測していたことを紹介している。そのうちの、金岡照光氏「敦煌本〈董永傳〉試探」(『東洋大学紀要文学部篇』20 一九六六年)や金文京氏「中国の語り物文学」説唱文学」(『中国通俗文芸への視座』東方書店、一九九四年)では、当時韻文の部分を変文と称していた可能性もあることが指摘されている。

(8) 変文や他の通俗文学類を、その文体と題目によって厳密に

分析すべきであることを提唱したのは向達氏「唐代俗講考」(一九三七年)である。周紹良氏、白化文氏らはそれをうけ、最近でも講唱体でなければ変文ではないことを強調されている。

(9) 変文に様々な文体があることは、鄭振鐸氏「中国俗文学史」に指摘され、以降、王重民氏「敦煌变文研究」(「敦煌变文論文集」上海古籍出版社、一九八〇年所収)、潘重規氏「敦煌变文集新書」(一九八二年、跋文)などでもこれに近い説が唱えられている。

(10) 姜伯勤氏「变文的南方源頭与敦煌的唱導法匠」(「華字」第一期、一九九四年)、

(11) 向達氏「唐代俗講考」(一九三七年)

(12) 李小荣氏「变文講唱与華梵宗教藝術」(上海三聯出版社、二〇〇二年)

(13) 敦煌文献についての様々な学説については、『敦煌の自然と現状』(講座敦煌第一巻、大東出版社、一九八〇年)等に詳しい。なお最近の学説に関しては拙稿「敦煌の文学文献と道教」(講座道教第六巻「中国の諸地域と道教」、雄山閣出版、二〇〇一年)にも紹介してある。なお同書注記(2)に「カラキタイ」とあるのは「カラハン朝」の誤記であるので、ここに訂正しておきたい。

(14) 前掲『敦煌の自然と現状』(講座敦煌第一巻、大東出版社、一九八〇年)等参照。

(15) 変文の文体に関する議論のなかで、筆者は、変文とは本質的には講唱体に限るものではない、との立場をとっている。そ

れを説明するために敢えて試みに変文を「講唱体」、「散文体」、「韻文体」の三種の文学スタイルによって分類しておく。

(16) 神田喜一郎氏「敦煌学五十年」(二玄社、一九六〇年)、前掲「敦煌の自然と現状」等参照。

(17) 狩野直喜氏「支那俗文学史研究の材料」(「芸文」7-1、一九一六年)

(18) 王国維氏「唐写本〈季布歌〉〈孝子董永伝〉残卷跋」(一九一九年)、同氏「敦煌発現唐朝之通俗詩及小説」(一九二〇年)は、紹介作品などよりみても、狩野氏の論考をうけて書かれたものと推測される。中国では王国維氏と同論文をもって通俗文学研究の祖とするのが一般である。

(19) 羅振玉氏「敦煌零拾」では、仏教説話によるものを「仏曲」として、後代にいう「降魔变文」、「維摩経講經文」、「歡喜國王縁」を紹介している。

(20) 青木正兒氏「敦煌遺書〈目連縁起〉〈大目乾連冥間救目变文〉及〈降魔变文〉に就いて」(「支那学」4・3・1927年)、倉石武四郎氏「目連变文紹介の後に」(「支那学」4・3・1927年)

(21) 鄭振鐸氏はまず「敦煌的俗文学」(「小説月報」第20巻第3号、一九二九年)によって講唱体文献を「变文」と「俗文」に分類したが、のちに『挿図本中国文学史』(一九三二年)では「变文」と「俗文」に二分類することをやめ、「变文」に統一している。そして、さらにそののちの『中国俗文学史』(一九三八年)では韻文体の押座文なども含めて「变文」を総称とする

ことを提唱している(一八〇頁)。

(22) 実ば劉復氏『敦煌掇瑣』(上)(中国中央研究院歷史語言研究所、一九二五年)ではすでに「舜子變」などの散文体的變文が紹介されていた。

(23) 顏廷亮氏主編『敦煌文学』(甘肅人民出版社、一九八九年)、顏廷亮氏主編『敦煌文学概論』(甘肅人民出版社、一九九三年)等でも、變文と講唱体との説がとられるが、「舜子變」や「劉家太子變」に対しては例外變文とするのみで詳細を控えている。また白化文氏は最近「对敦煌俗文学中講唱文学作品的一此二思考」(『国学研究』、北京大学出版社、二〇〇二年)を發表されたほか、二〇〇二年八月に北京理工大学で開催された国際敦煌学術史研討会でもこの点に言及され、例外變文は単なる写本の書き間違いにすぎず、變文ではないとの考えを強調されている。

(24) 筆者拙稿「敦煌的故事綱要本一」(姜亮夫・蔣礼鴻・郭在贻先生紀念文集)上海教育出版社、二〇〇三年)

(25) 金文京氏「中国の語り物文学」説唱文学」(『中国通俗文芸への視座』東方書店、一九九四年)

(26) 筆者拙稿「敦煌變文写本の研究について」(『東洋大学中国学会会報』第九号、二〇〇二年)

(27) この点については筆者博士論文「敦煌變文写本的研究」(復旦大学研究生院、二〇〇一年)に詳述した。本書は近刊予定である。

(28) 注(2)参照。

(29) 矢吹慶輝氏「大目乾連冥間救母變文」(『大正新修大藏經』85古逸部、一三〇七頁、一九三二年)

(30) 澤田瑞穂氏「支那唱導文学の生成」(『智山学報』13、一九三九、一九四〇年)

(31) V. N. Nicolas Śāriputra et les six maîtres d'erreur fac-similé du manuscrit chinois 4524 de la Bibliothèque Nationale, Présenté par Nicole Vandier-Nicolas avec traduction et commentaire du texte (Mission Pelliot en Asie Centrale, série in-quarto V) Imprimerie Nationale Paris, 1954. 他にP. 4524と變文の關係を論ずるものには、梅津次郎氏「變と變文」(『国華』70號、一九五五年)、秋山光和氏「敦煌本降魔變文(半度叉斗聖變)画卷について」(『美術研究』187號、一九五六年)、秋山光和氏「變文と絵解きの研究」(『平安時代世俗画研究』一九六四年)などがある。

(32) 水谷真成氏「一鋪の意義について」(『大谷支那学報』第2號、一九五七年)

(33) 筆者拙稿「敦煌變文研究概説及新観点」(『華林』第三期、中華書局、近刊予定)参照。

(34) 周一良氏「説唐代俗講考」(『大公报 図書館周刊』第6期、一九四七年)

(35) 關德棟氏「略説『變』字的来源」(『大晚报』通俗文学第25期、一九四九年)

(36) Victor H. Mair 'ang Transformation Texts (HARVARD UNIVERSITY PRESS, Cambridge (Massa-

chusetsu) and London 1989) 等参照。ちなみに本書は『唐代変文』(中国仏教文化研究所、一九九九年)として中国語訳が出版されている。

(37) 労働又闘聖変に関する壁画は、莫高窟だけでも十九点のこざれている。

(38) 王重民、王慶叔、向達、周一良、啓功、曾毅公等六氏編『敦煌変文集』(人民文学出版社、一九五七年)

(39) 『劉太子変』と同様の故事を記載する写本はP.3645のほかS.5547 P.4692 P.4051の四点が残されている。そのうちS.5547 P.4692はA故事しか記載されていないが、P.4051はA-D故事まじりが連続して記載されている。

(40) 現時点で、筆者はS.192写本は莫高窟第九八窟壁画との関係が有力であると考えている。

(41) 王重民等六氏編『敦煌変文集』(人民出版社、一九五七年)

(42) 黄微、張涌泉両氏著『敦煌変文校注』(中華書局、一九九七年)

(43) 池田温氏編『中国古代識語集録』(大蔵出版、一九九〇年)

(44) 著者拙稿「敦煌的故事綱要本」(『姜亮夫・蔣礼鴻・郭在贍先生紀念文集』上海教育出版社、二〇〇三年)

(45) 俗講と変文の関係については向達氏「唐代俗講考」(一九三七年初校)、『唐代長安与西域文明』三聯書店所収、一九五七年)以降、多くの研究者が指摘している。たとえば、孫愷第氏「唐代俗講軌範与其本之体裁」(一九三七年 摸印)、澤田瑞穂氏「支那唱導文学の生成」(『智山学报』13, 14 一九三九年、

一九四〇年)、那波利貞氏「俗講と変文」(中、『仏教史学』第一卷三号、一九五〇年)、福井文雅氏「俗講の意味について」(『フィロソフィア』53 一九六八年)、羅宗涛氏「敦煌講經變文研究(儀式考八七二―九七八頁文史哲出版社一九七二年)、平野顯照氏「講經文 組織内容」(『敦煌と中国仏教』大東出版社一九八四年)、福井文雅氏「講經儀式 組織内容」(『敦煌と中国仏教』大東出版社一九八四年)、王文才氏「俗講儀式考」(『敦煌学論集』甘肅人民出版社一九八五年)、金岡照光氏「講經文類」(『敦煌の文学文献』大東出版社一九九〇年)

(46) 筆者拙稿「敦煌変文写本の研究について」(『東洋大学中国学人会報』第九号、二〇〇二年)

(47) この点については、筆者は中国国家図書館主催の敦煌与丝路文化學術講座「敦煌文学与日本説話文学」(二〇〇二年八月十七日)で講演を行っている。この時の原稿は二〇〇三年中に刊行される予定である。

(48) 『興福寺日本国現報善惡靈異記』(便利堂、一九三四年、大屋徳城氏解説)、片寄正義氏「今昔物語集の研究」(三省堂、一九四三年)

[あらみ・ひろし 浙江大学敦煌学研究センター]